内海ITU事務総局長

ジュネーブ便り

（2004年10月）

◎内海事務総局長から

平和な日本にとっても、人質問題等、今や、セキュリティーは、避けて通れない現実問題になりました。大変な世の中になってしまったものです。問題は、単に少数の過激な犯罪者だけが事件を起こしているのではなく、民族と民族、文明と文明の摩擦までに発展してしまったことです。しかし、そのような対立は、今に始まったことではないことですが、どうも過去の対立とは異なるような気がします。

なぜなら、いかなる政府も、あるいは、正当に選ばれたすべてのリーダーが否定しているにもかかわらず、大規模な残虐な行為が、世界中で繰り返されることは、今までになかったことです。しかも、そのような行為を支持する多くの民衆の影が存在することです。要するに、従来の形の統治行為が働かなくなりつつあるということです。

米国大統領選挙は、セキュリティー問題を含めて世界中に重大な結果をもたらすのに、アメリカ人だけが選挙権を持っているということは、もはや、民主主義の原理に反しているといえるでしょう。主権国家が、統治行為を行えなくなり、18世紀的な民主主義体制が、合理的といえなくなった現実は、当然これらを前提とした現在の国際社会も、崩れかかっているということであるような気がします。

ITUの世界での、協調の精神と、政治化しないという良き伝統を堅持していくことが、これからの重大な責務のようです。

◎10月の事務総局長の主な動向

10月5〜14日　ITU世界電気通信標準化総会（ITU WTSA）（ブラジル、フロリアノポリス）

ネットワーク分野の標準化に関するITU標準化部門の総会が、ブラジルで開催されました。この総会では、今後4年間におけるITU標準化部門の取り組むべき課題の選定及び標準化の作業方法を採択しました。次世代ネットワーク（NGN）については、各国の関心も高く議論が難航しましたが、最終的には研究課題を設定し、検討体制を確立することができました。また、これまで全会一致が基本だった標準化手続を改定して更なる標準化手続の加速化も合意しました。

ネットワーク分野の標準化については、ITU以外にも世界には幾つもフォーラムなどが存在していますが、世界中の政府、メーカー及び事業者が一緒になって標準化作業を行っているのはITUだけです。それだけに各国は、ITUでの標準化の有用性、重要性を意識した戦略を持っていて、合意に至るまでの議論は白熱したものとなりました。

10月26日　WSIS準備体制の確立

来年秋のWSISに向けてWSIS実施事務局長の任命、ITU内部での統括、サブ、ロジなどの各責任者の任命を行い、準備体制を本格化しました。WSISの準備作業は、各国政府・民間セクターからの寄付金及び派遣職員で進めていますが、それでも足りない部分は今あるITUのリソースでカバーしています。このITUがカバーする部分が意外と大きな負担で、テレコム、理事会、各セクターの総会、SG活動など本来業務も拡大しているなかで、内部調整は至難でした。しかし、WSISの開催がITUにとっても絶好の機会であることを各職員が理解してきたことで、本格的な準備体制の確立に至りました。WSISまで、何回かのWSIS準備会合開催や、各国からの提案文書取りまとめなど、やるべき調整及び作業がたくさんありますが、うまくやり遂げられるものと信じています。

10月29〜30日　UN CEB会合（ニューヨーク）

アナン国連事務総長を議長として、国連専門機関の長で構成される国連機関長調整会議がニューヨークの国連本部で開催されました。同会合は、国連が直面している重要問題をテーマにして議論するもので、今年は、“デジタル・デバイドの解消”と“国境を越えた罪悪”がテーマになっています。“デジタル・デバイドの解消”は、まさにITUの使命であり、ITUが中心となってUNESCO、UNDPなどの機関と協議して作成したレポートを私から紹介する予定でしたが、議題は、喫緊のセキュリティーの問題に始終しました。

ニューヨーク郊外グリーンウード財団（国連機関長会議開催場所）
ここで世界の治安問題などが議論されるのは皮肉です。